

## 日本古語と沖縄古語の比較研究：熊本・熊襲・八十隈の「くま」を解く

著者	外間 守善
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	11
ページ	381-389
発行年	1985-03-15
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00002566">http://doi.org/10.15002/00002566</a>

# 日本古語と沖縄古語の比較研究

## —熊本・熊襲・八十隈の「くま」を解く—

外間 守善

記紀・万葉集・風土記・源氏物語などに、「くま」（隈・阿・曲・隅）という語が次のように使われて出てくる。

- 1 川<sup>のぼ</sup>浜りわが浜れば川<sup>くま</sup>区<sup>もも</sup>莽に立ち栄ゆる百足らず八十葉の木は（書紀一仁徳30年）
  - 2 山のまに隠るまで道の隈<sup>くま</sup>積るまでに（万—17）
  - 3 玉<sup>かつら</sup>縵の児今日のごと何れの隈<sup>くま</sup>を見つつ来にけむ（万—3790）
  - 4 山の阿<sup>くま</sup>に伏せ隠し、賊<sup>あだ</sup>を滅さむ器<sup>つはもの</sup>を造り備へて（常陸風土記）
  - 5 阿<sup>くま</sup>二巢<sup>スク</sup>ヒテ津ヲ響カス（知恩院本三蔵法師表啓古点）
  - 6 かの浦に、静やかにかくろふべきくま侍りなんや（源氏—明石）
  - 7 山里めいたるくまなどに、おのづから侍るべかめり（源氏—橋姫）
- それらの「くま」について、主だった古語辞典は次のように解釈している。

『大言海』（富山房・昭和8年）

- (1) 曲り入り，隠レテ見エヌ處，道ニモ，川ニモ云フ。
- (2) 籠<sup>こも</sup>り，隠ルルトコロ。物蔭。
- (3) 不明。クモリ。クラガリ。ワダカマリ。
- (4) トコロ。場所。

『日本国語大辞典』（小学館・昭和48年）

(1)道や川などの折れ曲がっている所。曲がりかど。

(2)奥まった所。物陰。かたすみ。

(3)へんぴな所。片田舎。

『岩波古語辞典』（岩波書店・昭和49年）

(1)湾曲しているものの曲り目。

(2)奥まった所。目立たない所。

(3)暗く陰になっている所。

(4)隠しているところ。秘めているところ。

ついでに『日本国語大辞典』は、「くま」についての従来の語源説もとりあげて便利なので、それらのうち主だったものだけでもかかげておこう。

#### 語源説

(1)オクマ（奥間）の上略か〔大言海〕。

(2)コリコモル（凝籠）意〔雅言考〕。

(3)水の入江は陸（クガ）が曲っているところから、クはクガ（陸）、マはマガリ（曲）の義〔日本釈名〕。

(4)入り込んだ処の義。クは物の中へ入り込む義で、マは間〔国語の語根とその分類＝大島正健〕。

(5)木の間は薄暗く蔭があるところから、キマ（木間）の転か〔日本古語大辞典＝松岡静雄〕。

(6)曲がり角の意で、朝鮮語 kop（曲）と同源〔万葉集＝日本古典文学大系〕。

さて、そこで、日本古語として使われているそれらの「くま」が、沖縄古語の中でどのように使われているか、伊波普猷による先駆的な研究があるので、それを紹介しておこう。

伊波は、『おもろさうし』の中に「くまもと」という話が六例あることをとり出し、その中の「嶽がくまもと」「屋比久くまもと」について次のように説明している。

「嶽がくまもと」には、「峰の麓の事也」と傍注まで附いてゐる。それで「くまもと」は山下即ち麓の義に解せるが、『琉歌百控乾柔節流』の永伊平屋節の本歌に  
伊平屋渡立波や浪やれば濤い  
岸が隈本の大波小波

とあるのを見ると、もつと広義に解しなければならなくなってくる。即ち「くま」は国語同様に隅又は入りこんだ処の義になり、「もと」は本又は下の義だから、右に引用したオモロ（省略）及び琉歌の用例から推すと、「くまもと」は山にも海にも云った、と見ていゝ。多分丘陵の麓などの曲線的な地形又は入り込んだ岸辺即ち浦（曲渚）などを指して云ったのであらう。この語はきつと古代国語にあったもので、熊本又は隈元等の固有名詞はその名残に違ひない。

『伊波普猷全集第六巻・「おもろ落穂集」』

つまり、伊波は、オモロ語、琉歌語の「くまもと」を日本古語同様に、「丘陵の麓などの曲線的な地形又は入り込んだ岸辺即ち浦などを指す」と解いたのである。慧眼というべきであらう。

ところが、伊波の研究以後出てきた『南島歌謡大成』（外間守善総編・全5巻・角川書店・昭和53年～55年）の神歌にみられる古語資料によると、伊波解釈の上にもう一つ別な意味を加えたほうがよさそうに思われる。

ウムイ301（粟国村西）

くまがいーに 拝まち	くま〈部落〉の上に拝ませて
まちゅがいーに ていじらち	まちゅ〈部落〉の上に手摩らせて
すいみちぬうむりぐわーや	スイミチ〈神女〉の思い子は
うむりぐわーぬうまうえーから	思い子の馬追いから
うち遊びみせんど	移り遊びなさるよ
また遊びみせんど	渡りの遊びなさるよ

ウムイ318（粟国島）

松が上に	まつ〈部落〉の上に
拝ましゃい	拝まして
くまが上に	くま〈部落〉の上に
ていぢらしゃい	手摩らして
拝でからー	拝んでからは
ていぢていからー	手摩ってからは

ウムイ411（粟国村）

まちゅがいーに	まちゅ〈部落〉の上に
うがまち	拝まして
くまがいーに	くま〈部落〉の上に
ていじらち	手摩らして
うち遊びみせんど	移り遊びなさるよ
わた遊びみせんど	渡り遊びなさるよ

これらのウムイにみられる「くま」は、いずれも「まちゅ」の同義語として使われているが、「まちゅ」はオモ口語「まきよ」の変

化形である。「まきよ」は、血縁集団による古代部落のことであるが、単に部落を意味する語としても使われている。

沖縄では、血縁による古代部落を「まきよ」と呼んでいたが、十二世紀頃に社会の変革がおこり、部落の離合集散があり、部落は地縁団体に変わっていく。そしてこれらの新しい部落は、「うら（浦）」、「しま（島）」、「さと（里）」などと呼ばれるようになっていく。

オモロ語の「まきよ」は、日本古語の「まき」とほぼ同義である。沖縄古語では、「ふた」「くた」「くら」が同義語として使われているが、そうだとすると、「ふた」「くた」「くら」のほか、「まきよ」「まちゅ」「くま」いずれも、「血縁集団による古代部落」あるいは、共同体的な「部落」を意味する語として使われる同義語だということになる。

「くま」が、そのように古い血縁社会時代の部落を意味する語であったとすると、記紀に出てくる「くま」についての西郷信綱の解釈が目につく。西郷はその著『古事記の世界』（岩波新書・昭和42年）で、国譲りの段の書紀一書にある「日隅宮」を文字通り日の隅すなわち西の辺地なる宮の意に解しながら、

これにたいし大国主は、かく宮居を造ってくれるならば、吾は「退りて<sup>サ</sup>幽<sup>カク</sup>りたる事を治めむ」と答えた。古事記のこれに相当する部分には、吾は「百足らず八十<sup>モモ</sup>咍<sup>ヤ</sup>手に<sup>ソクマデ</sup>隠りて待<sup>サモラ</sup>ひなむ」とある。書記本文にも「八十<sup>クマデ</sup>隈云々」とあるのだが、このヤソクマデは宣長以来とかれていくごとく黄泉の国をさすのではなく、相手にたいし出雲そのものを道の隈々を経た僻遠の地といったと見るのが至当である。（『古事記の世界』・「二、神話の範疇」）

と、ヤソクマデのクマを「僻遠の地」と解いている。しかもその解

き方の補注に、「ヤソクマデはあきらかに日隅宮を指す。クマデのデはウシロデ、シリヘデなどのデと同じで、場所や方向をあらわす接尾語である。」としているが、妥当な解き方であると思う。

西郷による「くま」の解釈は、その後に刊行された『日本国語大辞典』（小学館）が、積極的に「へんぴな所。片田舎」（前出）という新しい解釈をしたことともかかわりあっていることと思うし、また神歌にみられる沖縄古語とも響きあっているし、宣長以来の従来の解釈をただしたことにもなると思う。

そのことについて、いくつかの例を取りあげながら、傍証として考えてみたい。

まず、『角川日本地名大辞典』に拠りながら福島県の地名をとりだしてみる。福島県には著名な阿武隈川<sup>あぶくま</sup>をはじめ、熊川、隈戸川などが流れているし、村の名にも熊村、熊川村、熊耳村、熊倉村、隈戸村、熊町村などなど、「くま」の語がかなり目につく。中でも、現在の大熊町は、中世の戦国期にはただ「熊<sup>くま</sup>」とのみ称していたことが古文書に記されており、それが江戸期になって「熊村」となり、昭和に入って「大熊町」となっていく変遷がみられる。それでも「熊」は、そのまま大字名として残されている。つまり、「熊」すなわち「くま」は、「部落」を意味する古語であったことがわかる。なお、『常陸国風土記』には「苦麻之村<sup>くまのむら</sup>」と記されており、それは現在の大熊町一帯の地に比定されているようである。

ちなみに、阿武隈川<sup>あぶくま</sup>は、大熊、逢隈、合曲とも書き、「おおくま」ともいったということである。福島における「阿武<sup>あぶ</sup>」と「大<sup>おお</sup>」の対応は、沖縄古語における聖なる場所を意味するアフとオー（大・奥武）との対応（拙論「おもろ語あふの考察」『日本語の世界9・沖

縄の言葉』中央公論社）ともかかわるものであると思うが、そのことは後考にゆずることにしよう。

東北の福島だけでなく九州に目を転ずると、「くま」という語はもっと目立つようになる。熊本県球磨郡球磨村の「くま」は、福島県の「くま」と通ずるものであろうし、鹿児島・宮崎県に多くみられる人の姓の「隈元」<sup>くまもと</sup>、奄美大島の地名「大熊」<sup>だいぐま</sup>、大分県の川「三隈川」<sup>みくま</sup> などなど、「くま」のつく地名、人名、川名などは無数に出てくる。

そういうところをつなぎあわせてみると、熊本県の「くまもと」、人姓の「くまもと（隈元）」などは、沖縄におけるオモロ語の「たけがくまもと」の「くまもと」と深くかかわっている語であると思う。私は、オモロ語の「くまもと」について数年前次のように解釈している。

たけかくまもと（嶽か隈基） 嶽，杜の中心。「くまもと」は部落の奥まった所，元，中心の意。「くま」は「まきよ」（部落）と同意。原注に「峯の麓<sup>フモト</sup>の事なり」（21－1457）とある。「くまもと」参照。たけかくまもと（嶽か隈基），もりかくまもと（杜か隈基），やびくくまもと（屋比久隈基）

『おもろさうし辞典総索引』第二版（角川書店・昭和53年）

「くま」に部落，「もと」に基，元，奥まって中心になる所，という意味づけをしたわけである。熊本県の「くまもと」も，おそらく沖縄古語の「くまもと」と同根であると思われる。つまり，熊本は，部落の基，中心，という意味になるようである。

ついでに，九州に伝わる「熊襲」<sup>くまそ</sup>の語源についても触れておこう。金澤庄三郎はその著『日鮮同祖論』「熊襲国」の項で，熊襲の熊は，



勇敢だという意味の形容語であるという説（古事記伝）と、南方の襲族と並んで、筑紫の強族であったという説がある、ことを指摘しているし、『岩波古語辞典』も「熊襲」について、「南九州の球磨（くま）という地域と嶺南（そ）という地域とに住んでいた種族。南九州諸種族の代表。」のように解いている。しかし、今まで述べてきた「くま」という語の古い意味を考えると、「クマ（部落）のソ（男）」という解き方もできないものだろうか。「ソ（男）」について、私は、記紀・風土記などに出てくる阿勢・阿世・阿西・阿曾・阿自の「勢・世・西・曾・自」がいずれもS子音を共通にしながら男系の祖にかかわっている語であることに着目（拙論「按司の語源」『日本語の世界9・沖縄の言葉』所収参照）しており、それらと「曾・<sup>そ</sup>襲」とのつながりを考えたいのである。

「くまもと」「くまそ」について、「くましね」「くましろ」という語についても考えてみたい。『大言海』によると、

くましね<sup>クハシイネ</sup> 精 稲， 転ナラム。神ニ供フル精米。略シテ， くま。敬称シテ， おくま。<sup>オセンマイ</sup> 御洗米。<sup>オクマイ</sup> 御供米。  
くましろ<sup>クマシロ</sup>。奠代ノ義，<sup>シロ</sup>代ハ， 田地ノ段別ノ名。神供ノ<sup>クマシネ</sup>精米ヲ作ル田。

とあり、その他の古語辞典もほぼ同様の解釈である。私も、「くましね」が「神に供える米」であり、「くましろ」が「神に供える米を作る田」であることに賛成であるが、その場合でも、「くま」は部落の意を原義にし、遠つ祖たちの住み給うた「くま」に対する尊崇の念の広がりの中で、「くましね」「くましろ」という語が育っていったものであらうと考えている。

結び……以上のようにみてくると、冒頭にあげた記紀・万葉集・風

土記・源氏物語などの「くま」(隈・阿)語例は、「曲がりこんで隠れて見えない所」という意味のほか、「奥まった所。へんぴな所。片田舎。」そして、「山里にある古くからの部落」といったような意味を加えたほうが、より深く理解できるような気がする。

山の阿<sup>くま</sup>に伏せ隠し、賊<sup>あ</sup>を滅さむ器<sup>つはもの</sup>を造り備へて(常陸風土記)

阿<sup>くま</sup>ニ巢<sup>ス</sup>ヒテ津ヲ響カス(知恩院本三蔵法師表啓古点)

の例にみられる「阿」は、へんぴな部落を意味する「くま」であるし、『源氏物語』に使われている

かの浦に、静やかにかくろふべきくま侍りなんや(源氏—明石)

山里めいたるくまなどに、おのづから侍るべかめり(源氏—橋姫)などの「くま」になると、「山里にあるへんぴな部落、古い部落」であるらしいことが、もっとはっきり理解できてくる。

それらの「くま」と、沖縄古語にみられる「くま」とを比較対照させてみると、いよいよその感を深くするのである。

つけ加えになるが、沖縄の久米島具志川村に「くまぢ(久間地)」という地名がある。土地の人たちによると、西銘<sup>にしめ</sup>部落から分立した新しい部落であるという。しかし、分立は新しいのかも知れないが、「くまぢ」という語は、久米島でいちばん古い部落である西銘周辺の古名として、古老たちのかすかな記憶にとどまっていたからこそその命名だったのではないだろうか。『日本書紀』神代下にも「くまぢ(隈地)」があり、なんらかのかかわりを考えるべきであろう。

伊平屋島<sup>だ</sup>田名にあるクマヤーガマ(洞窟)のクマヤーも「隠<sup>こも</sup>る」に通ずる語であり、「隠る」はまた「くま」とも通ずる語であることを思えば、穴居生活をしていた頃の古い「くま」とクマヤーガマのつながりをも考えないわけにはいかない。(昭和60年1月17日稿)